

〈短 信〉

現代語「こそ」の結合卓立

青木 伶子

現代語の「こそ」について半藤英明氏は二種四類に分けて考察し、その特性は「二項の結合の成立如何そのものを対象とする段階を通過し、当然成り立つと考えられる諸結合のうち最上のものを提示するという段階にある結合とりたてである」と結論された。^{注1}これは傾聴すべき論である。但し少々言ひ足りない面もなくはないのでそれを補ひ、少しく訂すべきを訂し、^{注2}また未だ言及されなかった点についても考へてみたい。

〔その一〕 まづ現代語「こそ」の特性に関する結論であるが、それを尾上圭介氏の「は」に関する記述「他の並行的な結合が成立しないという環境の中でその結合が特に成り立つという確認のしかたをする」^{注3}になぞらへるならば、

他の並行的な結合が成立する中で、その結合が特に最上級のものとして成り立つといふ確認のしかたをするもの

であり、私はこれを「結合卓立」としたい。半藤氏の結論の言ひ換へに過ぎないが、簡潔な表現の方が今後の引用に際して便が多いと考へるからである。従つて私は、半藤氏が現代語「こそ」の特性を「結合卓立」と捉へたと見ようと思ふ。このやうな特性をもつが故に現代語「こそ」は、卓立であることを裏付けるやうな語、即ち比較や最上級を示す「最も・第一の・却つて」や強めの語「まったく・まことに・唯一の・真に」などと共存する事が非常に多い、と

いふことを指摘しておく。

。嫉妬こそベーコンがいったように悪魔に最もふさわしい属性である。〔『人生論』〕

。いま富み栄えている者よりも、貧困な無智のために苦しんでいる者たちのほうにこそ、おれは却つて、人間のもっともらしさを感じ、未来の希望が持てるように思えるのだ。〔『赤ひげ診療譚』〕

。その中でこそ真に、生きられるんだ。〔『草の花』〕

〔その二〕 氏によれば、不特定多数からのとりたて用法の中に④提題用法と⑤「は」の逆構造の用法とがあり、有限特定からのとりたて用法の中に⑥合文の用法と⑦「は」の逆構造の用法とがある。これらの中、⑧と⑨及び⑩の用法は「は」と比較しつゝ見た文構造の特徴による分類であるが④のみが異質である。分類規準は一貫してゐるべきであるから、④は「は」的構造の用法とでもすべきであらう（とすれば⑩も「は」的構造の合文用法とした方がよい）。氏の命名では、④用法における「こそ」のはたらきが提題にあるのだと主張しようとしてゐるかの如くに解される惧れがある。

〔その三〕 氏の考察において結合卓立で解けぬのは⑥の用法である。氏の考察は体言を承ける場合が中心である為、考察範囲を拡げた場合にはその分類に収らぬ用法もあらうし、結合卓立で解けぬものもなほ存するであらう。では、時に関する副詞を承けた場合、それは結合卓立で解けるのであらうか。それとも⑥の用法の如く結合卓立で解けぬ用法なのであらうか。

「こそ」が承ける時の副詞には私の見た限り「今・今度・今日・今年・明日・来年」等がある。それらの例には「は」と置き換へら

れさうなものもある。

㊦ 明日こそ発とう、明日こそと思ひながら一日のぼしにのびさせ、：『仮面の告白』

右の例を「明日は発とう、明日はと思ひながら」としても殆ど差がないやうである。しかし「は」の方は、右の例のやうに同じ意志を過去に何度も持ちながら実現しなかったといふ場合でなく、はじめで抱く意志の表現すなはち非対比の表現も次例の如く可能である。

㊧ 明日は見舞ひに行かう。
かかる場合に「こそ」を用ゐて、

㊨ 明日こそ見舞ひに行かう。

と言ふならば、それは見舞ひに行かうと思ひながら何度か実行しなかつたことになつてしまひ、㊧の表現意図とはずれてしまふ。㊨の例において置き換へ可能であるかに見えたのは文脈の然らしむるところである。繰返しによつてその意志をもつこと一度ならぬことを示し、更に「一日のぼしに」とその背景が説明されてゐるからである。このやうな文脈の支へなしに㊧の如くに表現すれば、過去との対比なしの時修飾ではない（㊧の表現で㊨と同様のニュアンスをもたせるには、「は」にプロミネンスを置かねばならない）。

さすれば㊧と㊨との違ひは、㊧が非対比であるのに対して㊨は「昨日は行かなかつた」「今日も行かなかつた」等との対比、即ち結合対比であるところにある、と説明し得るかに思はれる。

㊩ 今度は僕は留守番をしますよ。『山の音』

これは長年の間帰らなかつた故郷へ一度紅葉見に帰らうと言ふ父の言に対する息子の返事である。従つて原文では「は」の非対比用法である。しかしこの表現はそのままでは対比用法にもなる。既に息子

と共に故郷に帰つたことのある父が「もう一度行ってみよう」と誘つたのに対して右の如く答へたのだとすれば、「は」に特にプロミネンスを置かずとも、それは「前回自分は誘ひに依じて共に行った——留守番をしなかつた——けれども、今度は留守番をする」といふ意味の結合対比用法である。とすれば、同じく「前回は留守番をしなかつたけれども」といふニュアンスをこめての、

㊪ 今度は僕は留守番をしますよ。

と、結合対比といふ点においては何ら異なるところはなないことになる。つまり時の副詞を承ける用法において㊧と㊨の如き非対比の「は」と結合対比の「こそ」とを比較して違ふと指摘してみても何ら解決ならぬのであつて、殆ど差のないやうに見える結合対比の「は」と結合対比の「こそ」の違ひを解明しなければならぬのである。

㊫ も「前回留守番をしなかつた」といふ事情は同じであるが、その他の要因をも考慮に入れるならば両者の背景は決して等しくない。初回に誘はれた時に素直にそれを受け入れて同道したのであれば、二度目に留守番を志願するのに㊫の表現はとれるが㊬の表現はとれない。㊬が可能なのは、初回にも留守番をすると発言しただけでも重ねて誘はれてそれに依じた場合か、初回「留守番をします」と約束しながら履行しなかつた場合かである。即ち前回にも同じ意志表示のあつた場合に限られる。

㊬の表現は、

前回——留守番をしなかつた

今回——留守番をする

といふ二つの結合の対比であり結果的に排他である。

⑤の表現においても、

前回——留守番すると言ひながら実行しなかつた

今回——確かに留守番する

といふ二つの結合が意識されてゐることは勿論だが、それは否定と肯定との対比が重要なのではなく、前回と違つて今回は確かに実行するのだといふ点が重要なのである。このやうな効果をかもし出す「こそ」のはたらかしはやはり結合卓立といふのが妥当であらう。

④ ブータマ（少年の愛称）のパオイ（ゴマフアザラシの狐師言葉）が今日は帰ってきそうに思えた。

右の例では「は」にプロミネンスを置いた場合に限定して次の例と比較しつゝ考へる（プロミネンスを置いたことを二重傍線で示す）。

② ブータマのパオイが今日こそ帰ってきそうに思えた（『戸川幸夫動物文学』）

②は「今日は帰るか、今日は帰るか」の期待が毎日空しく外れてゐた経験下での表現である。④の場合もこの表現を支へてゐる現実自体は同じであるから、両表現の違いは先の④と⑤の場合よりも一層微妙である。しかし④の方は「昨日も一昨日も帰って来なかつた」といふ結合との対比にのみ表現意図があり、結果として否定と肯定の対比が強く意識にのぼる。それに対して⑤の方には、同様の結合対比が含まれてゐないとは言はないが、表現の主眼は否定と肯定の対比にあるのではなく、「今日」における確実性の強調に存するのである。よりはっきり言ふならば②と対比されてゐる結合とは「昨日も一昨日も帰って来なかつた」ではなく、「昨日も一昨日も帰って来さうに思えた」なのである。同様な結合との対比において確実性を強調する、とはまさに結合卓立である。

以上の如く、用例の多くは過去との対比における卓立であるが、未来との対比における卓立もある。

⑥ 今こそその時だ。（『学生時代』）

これは、将来においても機会が訪れぬとは限らないけれども（そんなことは問題外で）今が最適の機会なのだの意である。

なほ序に「こそ」の用法の狭さかと思はれる事実について触れておきたい。「は」には、

○ 昔は玉露をずいぶん飲んだ。（『山の音』）

○ 札幌に入院した時は一人の知人もなかつた。（『道ありき』）

などの他「十年前・昨夜・昨晩・前日・近年・当時・当日・その朝」のやうな、過去に属する時の副詞を承ける例が多く見られるのに「こそ」にはない。勿論皆無とは言はないが、「こそ」の場合は、

○ 遠く離れてゐた間こそ、快からぬ感情も湧いたけれども…

（『細雪』）

○ 昔こそ飛ぶ鳥をも落とす勢であつたが、今は尾羽うち枯らしてゐる。

のやうに合文の形をとらざるを得ず、
* 昔こそ玉露をずいぶん飲んだ。

といふやうな単文の例はないのである（合文は合文用法として別に論じなければならぬから、これに關しては今言及しない）。「今年こそは、今年こそは…」と思ひつゝ、数年失敗を続け、やうやく昨年合格出来たといふ場合、「昨年や」と合格した、或いは「昨年は合格した」とは言へるけれども「昨年こそ合格した」とは言へない。しかし「こそ」の特質が結合卓立にあるとするならばそれは当然のことである。歴史的事実としては一昨年もその前も合格しなかつた。

ったのであるから、昨年合格したといふ事実とは排他的な関係にある。従って「は」による結合排他表現は可能でも、卓立の「こそ」など使へるわけがない。要するに以上指摘した狭さとは、「こそ」自身の用法の狭さなのではなく、事実問題として卓立の「こそ」に適しい場合が過去に少ないことに起因してゐるのである。だから過去から現在に至るまで同じ状態が続いてゐるが、その中で過去のある一点の状態が最高のものであった、といふやうな事実があるならば「こそ」によって表現できる筈である。实例を得てゐるわけはないが、

十年前のあの時こそ私はまさに仕事の鬼だった。
は不自然な表現ではないと思はれる。

要するに、時の副詞を承ける「こそ」も結合卓立で解き得るのである。

注1 『成蹊国文』第十七号 (S 59・3) 58 页

注2 半藤氏には本誌135号短信に「こそ」を既知と未知の観点から述べたものもある。しかし氏の捉へ方に対する北原保雄氏の批判(本誌136集短信)はまさに当を得てゐるし、「こそ」の解明にこの観点がさして有効とも思はれないので、それには触れない。

注3 『国語と国文学』五八巻五号 (S 56・5) 103 页

——成蹊大学教授——

(昭和五十九年九月一日 受理)